

□新潟県中越地震におけるボランティア

活動の実態と課題

—ICT 活用の観点から—

大妻女子大学人間関係学部 教授 干 川 剛 史

1 はじめに

2004年10月23日に発生した「新潟県中越地震」では、長岡市・小千谷市・川口町など各地の災害ボランティアセンターの Web サイトには、ボランティア募集、支援物資・活動支援金の提供を呼びかける記事が掲載され、全国の人々がそれに応え、たくさんのヒト・モノ・カネが現地に集まり、災害ボランティア活動に貢献・活用された。

そこで、本稿では、2.新潟県中越地震における災害ボランティア活動の概要をとらえた上で、ICT(Information Communication Technology:情報通信技術)活用の観点から、3.筆者が7回にわたって情報支援活動と現地調査を行った「長岡市災害ボランティアセンター」でのICT活用の事例をとりあげる。次に、新しいICTとしての4.blog(Weblog)とGISをとりあげ、それらを災害時のボランティア活動に活用する際の利点と課題を考察する。

2.新潟県中越地震における災害ボランティア活動の概要

「平成16年(2004年)新潟県中越地震について(第54報)(平成17年3月18日18時00分現在内閣府)」

(http://www.bousai.go.jp/kinkyu/041023/ishin_niigata/jishin_niigata_54.pdf)

「(9)ボランティア関係」によれば、新潟県社会福祉協議会ボランティアセンター内に、「県災害救援ボランティア本部」を設置、救援ボランティアの連絡調整を実施。

- ・長岡市、小千谷市、十日町市などの現地ボランティアセンターの業務支援のため、関係都道府県・指定都市の社会福祉協議会がコーディネーターを派遣(11月1日)。
- ・長岡市、栃尾市、柏崎市、十日町市、川西町、中里村、小千谷市、越路町、小国町、川口町、見附市で災害ボランティアセンターを設置、連絡調整を実施。

表1 ボランティアの活動実績（累計）（2005年3月13日現在）

	累 計	備 考
長 岡 市	21,412 人	10/24 ボランティアセンター設置
栃 尾 市	1,337 人	10/24 ボランティアセンター設置
小 千 谷 市	24,957 人	10/27 ボランティアセンター設置
柏 崎 市	125 人	10/24 ボランティアセンター設置
十 日 町 市	6,985 人	10/24 ボランティアセンター設置
見 附 市	517 人	11/ 1 ボランティアセンター設置 11/21 終了
川 西 町	464 人	10/24 ボランティアセンター設置 11/30 終了
中 里 村	206 人	10/26 ボランティアセンター設置 10/31 終了
越 路 町	981 人	10/25 ボランティアセンター設置
小 国 町	1,583 人	10/28 ボランティアセンター設置
川 口 町	24,517 人	10/30 ボランティアセンター設置
計	83,084 人	

3. 長岡市災害ボランティアセンターにおける ICT 活用の事例

(1) 二つのホームページによる情報発信

「長岡市災害ボランティアセンター」（以下、「長岡 VC」）は、地震発生翌日の 2004 年 10 月 24 日 13 時に、長岡市社会福祉センター（長岡市水道町 3-5-30）内に開設され、約 2 ヶ月にわたり長岡市内の避難所に避難する長岡市及び山古志村の被災者に対する生活支援活動を行った。

同年 12 月下旬における避難所から仮設住宅への被災者の移転完了に伴い、同月 29 日から長岡市中央地区（操車場北）仮設住宅地内（長岡市千歳 1-23-7）に長岡市が設置した支援事務所内に長岡 VC が移転し、有給スタッフのコーディネーションの下にボランティアが被災者に対する生活支援活動を行っている。

長岡 VC には、事務局となっている長岡市社会福祉協議会のホームページから「長岡市災害ボランティアセンターからのお知らせ」という形でリンクされている公式ページ（http://virtual.niigata-inet.or.jp/nagafuku/a/o/06_topics/jishinbora.html）と「NPO 法人ながおか生活情報交流ねっと」から提供された blog を利用した準公式ページ（<http://www.soiga.com/a/>（蔣/））がある。

長岡 VC の公式ページは、長期的なボランティアの募集方針・長岡 VC の設置場所という基本的な情報が掲載され、更新は必要最小限にとどめられている。他方で、準公式ページは、情報担当ボランティアの頻繁な更新によって現地の最新情報が発信されており、多くの Web サイトからこのページにリンクが張られ、実質的に、長岡 VC の公式ページとしての役割を果たしている。

(2) ICT 環境

長岡 VC の情報通信回線は、長岡市社会福祉センターに地震発生前から設置されていた NTT 東日本の ISDN 回線を使用し、長岡市

社会福祉センター2階に配置されていた総務班・情報担当が、有線LANを組んでファイルとプリンターを共有し、インターネットを通じた情報の受発信を行っていた(写真1)。



写真1 長岡市災害ボランティアセンター総務班・情報担当の様子
(2004. 10. 31撮影)

なお、筆者は、2004年10月30日から12月28日にかけて断続的に6回にわたり長岡VCでICTを活用した情報支援活動を行った。そして、2005年3月12日に2ヵ月半ぶりに長岡VCを訪れ、悠久山仮設住宅で「除雪ボランティア活動」に参加した(写真2)。



写真2 長岡市悠久山仮設住宅での除雪ボランティア活動の様子
(2005. 3. 12撮影)

除雪ボランティア活動の後に、筆者が長岡VCのスタッフに聞いたところでは、その時点での長岡VCの情報通信環境に関しては、CArv回線に接続するLANを組んで、スタッフ各自がそこに接続するパソコンでインターネットを利用しているということであった(写真3)。



写真3 長岡市災害ボランティアセンターの様子 (2005. 3. 12撮影)

(3) 住宅地図検索・表示システムの活用

長岡市内の地図情報処理システム開発販売企業「(株)アイトム」から長岡VCへ2004年11月4日から貸与された住宅地図検索・表示システムとカラーレーザー・プリンターが活用され、県外や市外から来た土地勘の無いボランティアが活動現場に初めて行く時に、担当ボランティアが、パソコンを利用して地図を自由自在に拡大縮小して経路を検索し、目的地をポイントし、カラーレーザー・プリンターでプリントアウトした地図を提供した(写真4)。

この住宅地図検索・表示システムが導入される以前は、4つ組み合わせた机の上に長岡市の広域地図と住宅地図を広げて目的地を探し、当該地域が記載されている部分をコピーし経路をラインマーカーで引いてボランティアに渡すという、非効率なやり方

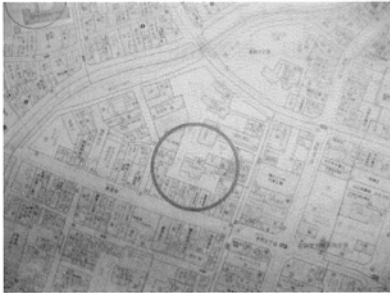


写真4 (なるせボランティアセンター
福祉活動専門員
音羽 博之氏 提供)

を行っていたが、このシステムの導入によりボランティアへの地図情報提供を大幅に効率化することができ、長岡VCの運営スタッフやボランティアから高い評価を受けた(写真5)。

4. 新潟県中越地震のボランティア活動における ICT 活用の利点と課題

(1)blog 活用の可能性と課題

長岡市災害ボランティアセンターのblogを利用した準公式ページのように、blogを災害ボランティアセンターのホームページとして用いる際の利点としては、一旦サイト上に開設してしまえば、ホームページ作成ソフトやファイル転送がいらず、初心者でも更新が簡単できるという管理の容易さがあげられる。

また、特定の記事に対して、web上でコメントを書き込むことができ、トラックバックという形で、異なるWebサイト上の関連する記事を相互にリンクすることができるので双方向の情報共有・交換にすぐれている。

さらに、これまで掲載されていた記事を

導入前



導入後

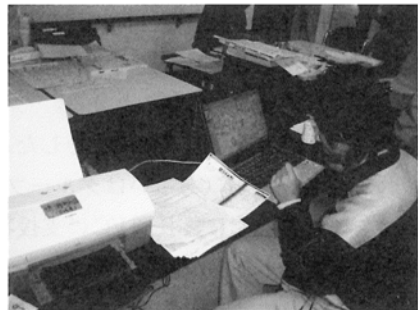


写真5 (なるせボランティアセンター
福祉活動専門員
音羽 博之氏 提供)

サイト上に残し、日付ごとやカテゴリーごとに遡って見る事ができる。

しかしながら、トラックバックによる記事の相互リンクを先へ先へとたどっていくと、それぞれの記事がどのようなつながりになっているのか、また、相互にリンクしている記事が掲載されているWebサイトがどのような関係にあるのか、たどっていけばいくほどわからなくなってくる場合が多い。さらに、災害ボランティアセンターのblogサイトの記事とリンクしている他サイトの記事には、信憑性に乏しいものも多々見られる。つまり、相互にリンクしている記事の中には、正確な事実を述べたものもあれば、単なる感想や思い込み的な意見もあれば、誹謗中傷や虚言に近いと思われる記事もあ

る。

さらに、サイト上にこれまで掲載されていた記事を、日付ごとやカテゴリーごとに何回も遡って見ていくと、最新の記事も数日前の記事も、数ヶ月前の記事も同じように表示されるため、記事の日付に注意していないと最新の記事と過去の記事を取り違えて読んでしまうことも起こりうる。

実際に、このような読み間違いをしたと思われる匿名の人物(あるいはグループ)から事前の連絡なしに、長岡 VC に支援物資として乾電池 1 万本が大小取混ぜて送られてきて、その仕分け作業のためにボランティアが労力と時間を割かざるをえなかった。

このようなblogを介した記事相互のつながりが、読み間違いによって流言のルートになってしまうことが危惧される。

そこで、blog という便利な道具を災害時のボランティア・コーディネーションに適した形に作り変え、それを確実に使いこなすやり方(情報リテラシー)を利用者が身につけることが、災害時の効果的な ICT 活用を図る上で不可欠であろう。

(2) GIS 活用の可能性と課題

災害研究者、マスメディア関係者、交通・ライフライン企業関係者、災害 NPO、航空測量・GIS 関連企業関係者、防災情報関連企業関係者、中央省庁の防災関係者などがボランティアとして参加し、「新潟県中越地震復旧・復興 GIS プロジェクト」が 2004 年 11 月に創設され、GIS を活用して各種の情報を地図上に集約し W6b サイトで情報発信を行っている。

提供されている情報は、主に中央省庁や

自治体、交通・ライフライン企業からの正確で信頼性の高い情報であり、それらは、国土地理院発行の数値地図 25000(地図画像)と衛星写真を用いた背景地図データの上に集約され Web で提供されている(<http://chuetsu-gis.nagaoka-id.ac.jp/datalist.html>)。

しかしながら、実際に、筆者が、長岡 VC の ISDN(常時接続)の通信環境でアクセスして利用しようとしてそれが不可能であったことから考えると、ADSL や CATV 回線、FTTH(光ファイバー)などのブロードバンド(大容量高速情報通信回線)を使わないと利用できないシステムであると推測される。

したがって、ブロードバンドが利用できる場所では非常に有用なプロジェクトであるが、残念ながら、ブロードバンド環境が無かった 2004 年末までの長岡 VC をはじめとする新潟中越地震被災地各地の災害ボランティアセンターでは、有効に活用できなかったと思われる。

しかし、今後、日本社会全体の情報化がさらに進展し、中小都市や中山間地域、離島でも ADSL 等のブロードバンドが日常的に利用できるようになるのは間近なので、「新潟県中越地震復旧・復興 GIS プロジェクト」のような災害時の Web 上での GIS 活用は、非常に有用で将来性のある試みとして高く評価できるであろう。